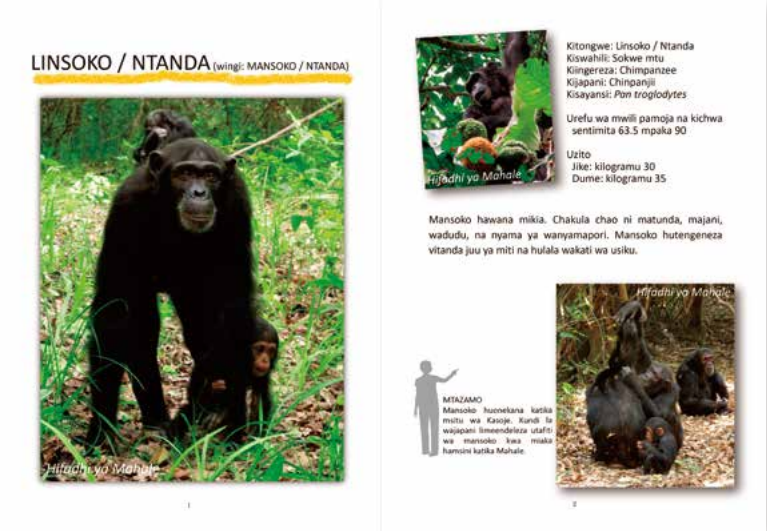
あつめる 1

知をあつめる図鑑

“Wanyama wa Mahale” の試み

座馬耕一郎
ざんま こういちろう / 長野県看護大学

図鑑とはある分野の知をあつめた本であり、情報は静的である。しかしアフリカの伝統的な知は、口承が織り成す動的な場である。動物とのかかわりが減った現代、子どもたちが口承から知をあつめることができるような動物図鑑を作成した。



図鑑の見開き。左上の見出しはトングウェ語名。右ページには、トングウェ名に加え、スワヒリ語、英語、日本語、学名を併記した。また、体の大きさと簡単な説明を加えた。

知識をあつめた本

図鑑は「あつめる」という言葉と親和性がある。写真や絵などの図版があつめられ、それを説明する知識があつめられて編纂される。一冊にその分野を網羅する多くの情報が詰め込まれるので「知識をあつめた本」と言うことができよう。しかしここでご紹介するのは、それとはちょっと異なる図鑑である。

図鑑のタイトルの“Wanyama wa Mahale”は、スワヒリ語で「マハレの動物たち」という意味である。マハレというのは、タンザニア連合共和国のタンガニィカ湖畔にあるマハレ山塊国立公園のことを指す。そしてこの本は、この地で調査するマハレ野生動物保護協会のメンバーが、トヨタ財団から助成をうけた研究の一環として、地元の方々の協力を受けながら編纂し、2015年に完成した動物図鑑である。

マハレの調査とトングウェの人々

マハレは1965年から西田利貞さんらにより長期調査がおこなわれてきた調査地である。チンパンジーの研究で有名だが、掛谷誠さんによるトングウェ（民族名）の人々に関する調査もおこなわれており、植生調査や、動物の密度調査など、多彩な研究が精力的に進められている。

調査はこの地で暮らすトングウェの人々と関わりが深い。トングウェの人々は焼畑農耕をおもな生業とし、また伝統的に狩猟や採集も営んで暮らしてきた。彼らの自然観は精細で、動物や植物は食物として利用されるだけでなく、薬に用いられたり、歌にうたわれるなど、象徴的な意味も豊かである。マハレではこういった文化的背景をもつトングウェの人々とともに調査をおこなっている。助手として研究者に同行してもらい、動物の追跡や植物の同定などを手伝ってもらっており、彼らの知識を研究者が借用する構図となっている。

トングウェの暮らしの変化

マハレは1985年に日本人研究者の支援を受けて国立公園に指定された。この時代はタンザニア政府による集住化政策が進められていた時代でもある。原野に点在していたトングウェの人々は、大きな村の中にあつめられて暮らすようになり、狩猟や採集の頻度は減っていった。また村では他言語を話す人々と集住しているため、共通語のスワヒリ語を話す機会が増え、トングウェ語を話す頻度も減っているようだ。

人々の暮らしの変化は、調査にも影響を及ぼしている。若い調査助手の中に、植物の名が分からない者や、動物の痕跡がみつけられない者が現れはじめたのだ。

図鑑のコンセプト

図鑑づくりは京都大学の伊藤詞子さんのアイデアだ。伝統的な知識が失われゆくのを感じ取り、もし失われたとしても、後世の人びとがトングウェの知識を再び利用できるようにと、植物図鑑の作成が進められている。しかし伊谷純一郎さんも述べているように、トングウェの植物の知識は膨大である。そこで第一歩として、比較的容易な動物図鑑の作成を試みることになった。

図鑑のコンセプトは、トングウェの伝統的な知識を若い世代に伝えることである。しかし「伝える」とはどういうことだろうか。作成前に、さまざまな角度から考えた。

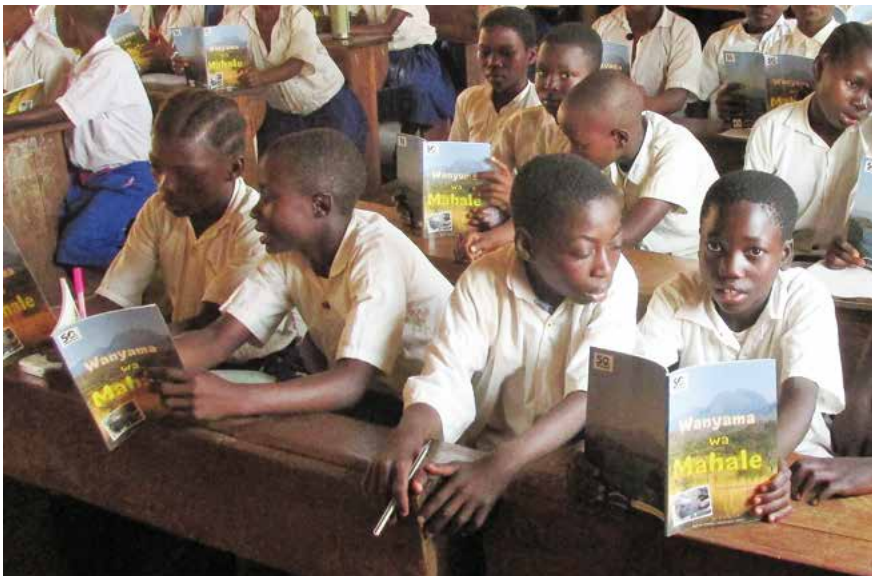
現代は野生生物の生息地に保全の波が押し寄せている時代である。その波は、ともすれば「乱獲や乱伐を抑えるために、無知な地域住民に、正しい知識を教育する」という「環境教育」に話が進みがちである。しかし本当に住民は無知なのだろうか。また「正しい知識」とは何をもって正しいといえるのだろうか。

トングウェの人々が暮らしの中で培ってきた自然観は、人や生物などの関わりをあらわしたひとつの体系である。たとえばLulyolwakapeというトングウェ語の名前をもつ植物は、ブルーダイカー（kape）の食べ物（lulyo）という意味をもつ。これは小さくて甘い実のなる背の低い植物で、森の中でも地表面の近くに密生する。ブ

Lulyolwakape。Kapeの食べ物という意味のトングウェ名をもつ灌木。紫色の実は甘く、チンパンジーも食べる。私もおいしく食べた。

Kape（ブルーダイカーのトングウェ語名）。頭胴長が55～90 cmと小さい。

Mpweje/Nkumpa。ウォーターバックは2つのトングウェ語名をもつ。森林よりも疎開林を好む。この写真を撮ったときは、興奮した。



地元の小学校で子どもたちに図鑑を配布した。目の前にある国立公園に棲む動物に興味をもって、さまざまな知識をあつめていってほしい。

ルーダイカーは果実を好む背の低いウシ科の動物なので、この実は格好の食べ物だろう。植物の名にトングウェが見出した生物の関係が反映されていることを思えば、わざわざ「環境教育」を外国から輸入し、翻訳して伝える必要性が感じられない。

では図鑑にはトングウェの知識を詰め込めばそれでよいだろうか。それが正しい知識を伝えるということだろうか。それについても疑問を感じた。トングウェの知識は、ほかの多くの地域の伝統的な知識と同様に、語り継がれてきたものである。その伝達は「コピー・アンド・ペースト」ではなく、語る者や、聞く者、語られる場などのさまざまな条件により、さまざまな変異をもって伝わるものである。図鑑というある種の「力」を持つ物が、トングウェの知識のほんの一握りを採用し、固定し、「正しい知識」として権威づけてしまったら、幅のある豊かな知識を矮小化させてしまうかもしれない。

もともと動植物の知識の伝わる場は、その動植物と接する機会につくられていたと考えられる。たとえば親子で狩猟に行くといった機会である。そして現代は、そういう機会が減少した時代である。ならばこの図鑑は、トングウェが動物について語る場をつくり出すことを目的にしたらよい。そう考えて、図鑑の構成を考えていった。

写真をあつめる

マハレにいる哺乳類動物は、トングウェ語名で約50種類を数える。タンザニア全土に視野を広げれば、もっと多くの動物がいる。しかしこの土地で暮らす人々の語りを引き出すための図鑑なので、マハレにいる種類に限定して掲載した。動物の写真もマハレやマハレの近傍で撮影されたものをあつめた。私の写真に加えて、マハレで長期調査をしている中村美知夫さんと、センサーカメラを用いながらヒョウの調査をおこなっている仲澤伸子さん、大谷ミアさん、ハイラックスの調査をしている飯田恵理子さんから写真を提供していただいた。

どうしても手に入らない写真は、絵に描いた。写真を撮りに行けばよいと思われる方もいるかもしれないが、動物の写真は、行けば撮れるというものではない。たとえば私がチンパンジーの写真を撮ったのはマハレに到着した翌日だが、ウォーターバックの写真が撮れたのはそれから14年後のことだ。図鑑に載せた写真は、研究者が長い時間をかけ、苦労してあつめてきた写真なのだ。

知をあつめるための図鑑

図鑑は見開きに1種類を紹介する構成とした。見出しはトングウェ語名で、写真は複数枚。体の特徴や生息場所などの説明は、できるだけ短くした。

説明を短くするというのは、一般的な図鑑とは方向性が異なるかもしれない。動物図鑑は一般的に「自分が見聞きした動物について、図鑑から知識を学び、それを自分の知識とする」といった使われ方をするだろう。それに対してこの図鑑は「開いて動物写真を見る」だけで十分だ。子どもたちがいつかその動物のことを親や近所の長老にポロリと話せば、それをきっかけに「山の東でよくみかけた」とか「その動物の歌もあるよ」といった、年長者による動物の語りの場がつくられるだろう。

そういった意味で、この図鑑は知識をあつめた本ではない。「あつめる」というテーマに即して言えば、子どもたちが年長者のもつ知識をあつめるための図鑑、といった方がよいだろう。子どもたちは、皆、同じ知識を手に入れるのではなく、図鑑を介した関わりにより、それぞれの知識をあつめるだろう。「知のあつまり」といった静的な本ではなく、「知をあつめる」といった、動的な本になってほしいと願っている。

＊写真はすべて筆者撮影。